

P-259 子宮頸部高度異形成及び上皮内癌に対するCO₂レーザー蒸散後に出現する軽度異形成細胞類似異常細胞の特徴とその意義に対する研究

千葉大学医学部産婦人科

三橋 暁、高野 始、杉田道夫、武田 敏、
関谷宗英

【目的】子宮頸部CO₂レーザー蒸散治療後の組織修復過程において間質系及び上皮系の修復細胞の出現は一般的であるが、我々は治療有効例に、一時的に細胞診上、極めてdysplastic cellに類似した、修復細胞とは異なる表層型の核異常細胞の出現を認め、また組織診でも異常を指摘された症例を経験した。我々はCO₂レーザー蒸散施行した境界病変24例につき、この異常細胞の出現頻度、出現時期、細胞形態学的特徴と、治療効果の判定につきretrospectiveに検討した。【方法】対象は平成5年8月より平成7年3月までに当院にてCO₂レーザー蒸散治療された子宮頸部高度異形成6例及び上皮内癌24例で、治療後2、4、8、12週、以後3カ月ごとに施行したコルポ像、細胞及び組織所見を検討した。【成績】治療後6ヶ月以上異常認めず治癒と判定した症例17例。治療後6ヶ月以内に一時的に細胞診でclass III、または組織診で異常を指摘された症例13例、このうち2～6ヶ月の経過観察にて異常が消失した症例7例。6例は2～4ヶ月時に再度レーザー蒸散施行その後6ヶ月以上異常を認めていない。異常細胞は24例中7例に認め、治療後2～6カ月の間に出現、dysplastic cellに極めて類似しており、エオジン好性の表層、中層型細胞で核異常が見られ、核小体は認めないことが多い。治療前に見られた旁基底型の異形成細胞及び悪性細胞や修復細胞とは明らかに異なった。【結論】治療効果の判定に、一定期間をおく必要があるとともに、この軽度異形成細胞類似異常細胞とdysplastic cellの鑑別が重要であると考えられた。

P-260 子宮頸部悪性腺腫(Adenoma Malignum)の臨床病理学的検討

癌研究会附属病院 ○平井康夫、芳賀厚子、田中尚武、山脇孝晴、竹島信宏、梅澤聡、片瀬功芳、清水敬生、陳瑞東、山内一弘、加藤友康、荷見勝彦

【目的】子宮頸部悪性腺腫(Adenoma Malignum)は、頸部腺癌の中でも非常に高分化なため形態学的にも正常からの逸脱が少ない稀な病変である。本研究の目的は、症例数が少ないためその本態に不明な点が多い子宮頸部悪性腺腫の臨床病理学的特徴を明らかにすることである。【方法】過去45年間に当科で経験した子宮頸部腺癌手術症例454例の病理組織標本を「子宮頸癌取り扱い規約」にそって見直し、悪性腺腫と診断された症例を対象とした。その際、悪性腺腫に相当するような極めて高分化な病変が一部に存在しても、全体としては通常の高分化型腺癌と考えられるものは本研究の対象から除外した。【成績】悪性腺腫と診断された症例は、7症例(頸部腺癌全体の1.54%)と非常に少なかった。7症例のFIGO臨床進行期は、Ib期5例、IIb期1例、不明1例であり、術前生検で5例57.1%が腺癌と診断されたが、1例14.3%はEndocervical glandular hyperplasiaとされ、1例は癌を疑わず生検が施行されなかった。術前細胞診では、6例中4例(66%)で腺癌の診断がなされ、1例が擬陽性であった。治療は原則として広汎子宮全摘が施行され、その5年生存率は83.3%(5/6)であった。臨床症状としては水様帯下または血性帯下がすべての症例にみられ、術前細胞診では、特徴ある大きなシート状集塊の出現が本疾患の推定に重要であった。【結論】悪性腺腫の予後は、従来の報告では極端に悪いとしたものもあるが、我々の症例のようにII期以前に発見され、適切な治療を受ければ、少なくとも通常の高分化型頸部腺癌と同程度の予後を期待できることが明らかとなった。悪性腺腫の早期の診断のために、臨床症状と細胞診が補助診断として特に重要と考えられた。